

児童の自己統制と役割取得が向社会的行動に及ぼす影響

塚 本 伸 一 *

Effects of Self-Control and Role-Taking on Prosocial Behavior in Children

Shinichi TSUKAMOTO*

The purpose of this study was to investigate the relationship among children's self-control, role-taking and prosocial behavior. Subjects were 45 first and 53 second graders. They were provided with two opportunities to display prosocial behavior: (a) to donate toys to poor children, and (b) to help an adult complete a task. Role-taking ability was assessed with three types of role-taking tasks: (a) Flavell task, (b) Selman task, and (c) communication task. Self-control was measured with teachers' self-control rating scale. A $2 \times 2 \times 2$ (sex $\times$ self-control $\times$ role-taking) analysis of variance was conducted on donating behavior scores. Results indicated that high-self-control and high-role-taking children donated more toys.

key words: self-control, role-taking, donating, helping

Mussen & Eisenberg-Berg (1977) によると、向社会的行動とは“外的な報酬を期待することなしに、他者や他の集団の人々を助けようとしたり、こうした人々のためになることをしようとする行動のこと”であり、“このような行動をする場合には、行動をする側に、ある損失や自己犠牲、危険といったものがともなうことが多い”。この定義によると、向社会的行動の遂行には外的強化に依存せず、自己の向社会的判断に従って自律的に行動する力、自己の利己的な欲求の満足を遅延し抑制する力、すなわち自己統制力が必要であると考えられる。

Long & Lerner (1974) は自己統制力の測定として満足遅延課題を用い、小学4年生を対象に寄付行動

との関係を検討している。被験者は研究に協力した報酬として70セントを受け取り、同時に貧しい孤児に寄付することもできると教示される。実験結果から、自己統制力の高低が明らかに寄付行動に影響することが見出されている。しかし、このような自己統制と向社会的行動との関係を検討した研究は極めて少ない。

ところで、菊池(1983)によると、向社会的行動が生じるプロセスには“状況の認知”、“意思決定”、“行動”という3つの段階が存在し、さらに、向社会的判断、共感性、役割取得能力の3要因が“状況の認知”と“意思決定”を媒介するとしているが、この役割取得能力、すなわち、他者感情の理解能力が

* 立教大学文学部
Rikkyo University, Faculty of Letters

自己統制力によって規定されているという研究が存在する。丸野 (1988) は 4, 5, 6 歳児を対象に、自己統制力の高低と他者の感情理解との関係を検討している。自己統制力は自発性、欲求不満耐性などの保育士の評定によって、また、感情理解は、例話の主人公の気持ちを表情図から選択させる方法によって測定された。その結果、自己統制力が高いほど他者の感情がよく理解できることが報告されている。

丸野の結果と菊池のモデルをあわせて考えると、Long et al. (1974) の結果は、自己統制力が向社会的行動の遂行を直接規定していることを示すものではなく、役割取得能力への影響を媒介とした間接的なものである可能性が示唆される。しかし、自己統制力、役割取得能力が相互にどのように関連し、どのような影響を向社会的行動に与えているのかを検討した研究は存在しない。そこで、これら 3 要因の関連を分析し、自己統制力と役割取得能力が子どもの向社会的行動に及ぼす影響を明らかにすることが、本研究の第 1 の目的である。

ところで、役割取得能力とは“自他の観点の違いを意識し、他者の観点に立つことにより、他者の欲求・意図・信念・感情・知覚などの内的特性を推論する能力、及び、それによって得た情報を対人交渉において利用する能力”(木下, 1977) のことである。従来、役割取得能力は様々な方法で測定され、向社会的行動への影響が検討されてきた。これらを分類すると、知覚的役割取得能力、情緒的役割取得能力、認知的役割取得能力、社会的役割取得能力、コミュニケーションにおける役割取得能力の 5 つに分けることができるであろう。

知覚的役割取得能力を扱った研究には Underwood & Moore (1982), Buckley, Siegel & Ness (1979), Zahn-Waxler, Radke-Yarrow & Brady-Smith (1977) がある。Underwood et al. (1982) は、小学校 1 ～ 5 年生を対象に Piaget の 3 つ山問題と寄付行動との関係を検討し、両者の間に有意な相関を見出している。また、Buckley et al. (1979) も 3 ～ 8 歳児を対象として、3 つ山問題と掃除を手伝う援助行動及びクッキーを分ける分与行動に有意な相関を見出している。しかし、3 ～ 6 歳児の援助行動や寄付行動との関係を調べた Zahn-Waxler et al. (1977) では、有意な相関は認められていない。他方、情緒的役割取得の代表的な課題である Borke (1971) の課題を使い、3 ～ 8 歳児を被

験者とした Buckley, et al. (1979) は、援助行動や寄付行動の多く見られる子どもは、役割取得の得点が高いことを明らかにしている。ところが、4 ～ 5 歳児を被験者とした Eisenberg-Berg & Lennon (1980) では、分与及び援助行動と役割取得能力に有意な相関は見られていない。これに対して、認知的役割取得の代表的な課題である Flavell, Botkin, Fry, Wright & Jarvis (1968) のニッケル・ダイム・ゲームを使った Iannotti (1978) によると、9 歳児では寄付行動との間に有意な相関が見られるが、6 歳児では相関は見られない。一方、Selman & Byrne (1974) の社会的役割取得課題を用いた Iannotti (1978) は、寄付行動との間に有意な相関があることを報告している。さらに、Krauss & Glucksberg (1969) のリファレンシャル・コミュニケーション課題 (以後 R C 課題と略す) を用い、7 歳児を対象にコミュニケーションにおける役割取得能力と分与行動及び援助行動との関連を検討した Rubin & Schneider (1973) によると、各変数間に有意な相関が存在する。

このように、これまでの研究には役割取得課題の種類によって、役割取得能力と向社会的行動の間に関連があるとするものとないとするものが存在し、一貫した結果は得られていない。そこで本研究では、代表的な 3 つの役割取得課題について向社会的行動との関係、また課題相互の関係もあわせて検討することとする。

方 法

被験者

被験者は小学校 1 年生 45 名 (男子: 25 名, 女子: 20 名) と 2 年生 53 名 (男子: 26 名, 女子: 27 名) の計 98 名である。

自己統制尺度

塚本 (1995) の自己統制尺度を用いた。この尺度は、“個人的自己統制”, “对人的自己統制” の 2 下位尺度、計 15 項目から構成されている。各項目に対する反応形式は、“全くそうである” から “全くそうではない” までの 5 件法である。評定は、各学級担任が自分の学級の児童全員について行った。

役割取得課題

役割取得能力の測定は、3 種の課題によって行われた。すなわち、認知的役割取得課題として Flavell 課題、社会的役割取得課題として Selman 課題、コミュ

ニケーションにおける役割取得の課題として RC 課題である。各課題の評定は、筆者と実験助手との合議によって行われた。

RC 課題 言語的に命名しにくい複雑な図形を他者に伝達する課題である。この課題の遂行には、自分と他者の違いを把握し他者の立場に立ってメッセージを構成する能力が必要とされる。本研究では、Krauss & Glucksberg (1969) の課題を変形したものを用いた。

被験者と実験者は衝立を隔てて向かい合ってすわる。両者は共に、3 種の図形がひとつずつ描かれたカードを 3 枚持っている。被験者の課題は、この 3 枚のカードを右から順に並べ、その並べ方を実験者に言葉だけで伝えることである。

実験者は被験者の表現を記録し、自己中心的で私的な表現をする段階から慣用的で共通の理解が可能な表現ができる段階までの 4 段階に分類し、それぞれ 0～3 点を与えた。

Flavell 課題, Selman 課題 手続き及び採点は山岸 (1981) に従った。

向社会的行動

援助行動 援助行動の内容は、被験者が見知らぬ大学生の封筒入れ作業を手伝うかどうかということである。

被験者は、一連の役割取得課題を遂行する前に 1 人別室で待たされる。被験者が 1 人ですわっていると、大学生がやって来る。大学生は被験者を隣の部屋へ連れて行き、机の上に山積みされた 100 通の手紙と封筒を見せる。そして、この手紙をすぐにポストに入れなければならないので、封筒入れを手伝って欲しいと頼む。

被験者が手伝うと答えた場合には、何通手伝ってくれるかも尋ねる。このとき答えた数を援助量とした。手伝わないと答えた場合には、元の部屋へ連れて帰る。

寄付行動 一連の役割取得課題の終了後、実験者は被験者に実験に参加してくれたお礼と言ってカードを 3 枚与え、このカードは後で好きな文具と交換できると教示する。被験者がカードを受け取って帰ろうとすると、実験者は次のような教示をする。

“あ、あのね、この写真を見たことがありますか (難民の写真を見せる)。この人たちは外国の人たち

で、とても貧しくて食べ物も手に入らず困っています。もし、〇〇ちゃんが今もらったカードをこの箱 (『こまっている人のはこ』と書かれた箱を示す) に入れてくれれば、そのカードでこの人たちに贈物をしてあげることができます。でもそうすると、〇〇ちゃんは箱に入れた分の文具はもらえなくなります。カードは箱に入れても入れなくても、どちらも構いません。もし、この人たちを助けたいと思ったなら、この箱の中へ好きなだけカードを入れて帰ってください。私は、隣の部屋の様子を見に行きます。”

以上の教示の後、実験者は被験者を残して退室する。寄付箱には、あらかじめ 5 枚のカードが入れている。被験者が退室した後、実験者は部屋に戻り寄付した枚数を記録する。この枚数を寄付量とした。

なお、実験者は実験終了後、“一生懸命お手伝いをしてくれたお礼に、カードを持っている人にも持っていない人にも全員にプレゼントを差し上げます。好きなものを選んで下さい。”と言ひ、手持ちのカードの枚数にかかわらず、被験者全員に好きな文具を同数与えた。

結 果

自己統制

自己統制の全体得点、個人的自己統制得点、対人的自己統制得点に関して、2 (学年) × 2 (性別) の分散分析が行われた。その結果、対人的自己統制で学年の主効果が有意 ($F(1, 94) = 4.65, p < .05$) であった。2 年生の対人的自己統制力は 1 年生よりも有意に高くなっている。対人的自己統制にのみ学年差が見られ、個人的自己統制には見られないという結果は、塚本 (1995) を支持するものである。

以後の分析では、各得点の平均値を基準に全体得点 28 点以下を自己統制低群、29 点以上を自己統制高群、個人的自己統制得点 15 点以下を個人的自己統制低群、16 点以上を個人的自己統制高群、対人的自己統制得点 13 点以下を対人的自己統制低群、14 点以上を対人的自己統制高群とする。

役割取得

役割取得の各課題得点について、2 (学年) × 2 (性別) の分散分析を行ったところ、RC 課題で学年の主効果が有意 ($F(1, 95) = 9.48, p < .01$) であった。2 年生は 1 年生よりも有意に役割取得能力が高

い。次に、3課題間の相関を調べたところ、有意な相関は認められなかった。

なお、以降の分析では各課題得点の平均値に基づき、Flavell 課題で3～1点の者を役割取得能力の高群、0点の者を低群、Selman 課題では6～2点の者を役割取得能力の高群、1、0点の者を低群、RC 課題では9～6点の者を高群、5～0点の者を低群とする。

向社会的行動

寄付量と援助量の平均値を学年別、性別に示したのが Table 1 である。課題別に2(学年)×2(性別)

Table 1 向社会的行動の平均得点

		男子	女子
寄付量	1年生	0.68 (0.61)	1.14 (0.83)
	2年生	0.62 (0.63)	0.89 (0.85)
援助量	1年生	14.53 (20.00)	17.37 (24.25)
	2年生	27.46 (20.93)	16.56 (13.51)

() 内 SD

の分散分析が行われた。なお、寄付量の分析は、寄付枚数を対数変換した値に関して行われた。これは、以後の分析においても同様である。その結果、寄付量で性別の主効果のみ有意 ($F(1, 94) = 4.5, p < .05$) であり、女子が男子より有意に多くの寄付を行っている。

援助行動と寄付行動の関係を調べるために寄付量と援助量の相関を調べたところ、有意な相関は見られなかった。

なお、寄付量、援助量ともに、学年の主効果及び交互作用が有意でなかったため、以後の分析は学年を込みにして行う。

自己統制、役割取得、向社会的行動の関係

自己統制全体得点高低、役割取得得点高低、性別に寄付量、援助量を示したのが Table 2～7 である。

自己統制力と役割取得能力が援助行動及び寄付行動に及ぼす影響を検討するために、2(性別)×2(役割取得能力の高・低)×2(自己統制力の高・低)の

Table 2 自己統制・Flavell 課題・性別の寄付量

		自己統制高群		自己統制低群	
		男子	女子	男子	女子
Flavell 課題	高群	0.88	1.20	0.60	0.63
		(0.33)	(0.65)	(0.71)	(0.48)
	8	15	15	8	
	低群	0.58	1.00	0.63	0.92
		(0.64)	(1.05)	(0.60)	(0.99)
		12	9	16	13
上段：平均値 中段：(<i>SD</i>) 下段： <i>N</i>					

Table 3 自己統制・Selman 課題・性別の寄付量

		自己統制高群		自己統制低群	
		男子	女子	男子	女子
Selman 課題	高群	0.63	1.09	0.56	1.14
		(0.48)	(0.79)	(0.69)	(0.83)
	8	11	9	7	
	低群	0.75	1.21	0.64	0.64
		(0.60)	(0.86)	(0.64)	(0.81)
		12	14	22	14
		上段：平均値		中段：(SD)	下段：N

Table 4 自己統制・RC 課題・性別の寄付量

		自己統制高群		自己統制低群	
		男子	女子	男子	女子
RC 課題	高群	0.67	1.38	0.70	0.83
		(0.47)	(0.86)	(0.78)	(0.80)
	6	8	10	12	
	低群	0.71	1.06	0.57	0.78
		(0.59)	(0.80)	(0.58)	(0.92)
		14	17	21	.9
上段：平均値 中段：(SD) 下段：N					

Table 5 自己統制・Flavell 課題・性別の援助量

		自己統制高群		自己統制低群	
		男子	女子	男子	女子
Flavell 課題	高群	12.57	18.75	25.39	17.14
		(11.88)	(12.81)	(25.49)	(15.55)
	低群	7	16	13	7
		27.44	13.56	19.29	17.08
		(25.01)	(15.46)	(16.22)	(27.42)
		9	9	14	12
		上段：平均値		中段：(SD)	下段：N

Table 6 自己統制・Selman 課題・性別の援助量

		自己統制高群		自己統制低群	
		男子	女子	男子	女子
Selman 課題	高群	23.88	12.46	18.63	15.71
		(28.09)	(10.10)	(11.29)	(34.58)
	8	11	8	7	
	低群	18.00	19.00	23.74	17.92
		(11.39)	(15.94)	(24.29)	(13.91)
		8	15	19	12
上段：平均値 中段：(SD) 下段：N					

Table 7 自己統制・RC 課題・性別の援助量

		自己統制高群		自己統制低群	
		男子	女子	男子	女子
RC 課題	高群	30.0	17.8	21.3	20.8
		(7.1)	(16.2)	(15.1)	(26.2)
		4	9	9	12
	低群	17.9	15.4	22.7	10.7
		(23.9)	(12.9)	(23.9)	(17.0)
		12	17	18	7
		上段：平均値	中段：(SD)	下段：N	

分散分析が行われた。役割取得課題は3課題、自己統制尺度には全体得点、個人的自己統制得点、対人的自己統制得点の3得点が存在するため、援助量と寄付量のそれぞれについて9種類の分散分析が行われたことになる。

その結果、援助行動については、性別×RC課題×対人的自己統制の分散分析において有意な3次元の交互作用 ($F(1, 80) = 4.68, p < 0.05$) が認められた。下位検定を行うと、男子では自己統制力高群において、役割取得能力が高い場合に低い場合よりも援助量が多くなる傾向がある ($t(11) = 1.45, p < .1$)。これに対して、女子では自己統制力低群において、役割取得能力が高い場合に低い場合よりも援助量が多くなる傾向がある ($t(9) = 1.82, p < .1$)。

一方、寄付行動については、性別×Flavel課題×個人的自己統制の分散分析において、Flavel課題×個人的自己統制の交互作用が有意 ($F(1, 88) = 4.13, p < .05$) であった (Figure 1)。下位検定を行うと、

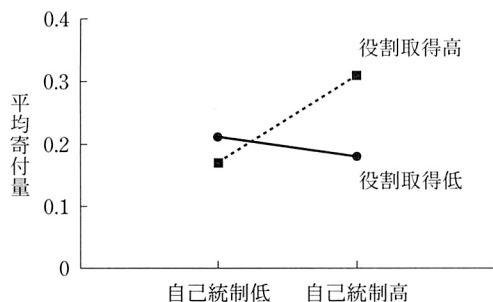


Figure 1 Flavel 課題と個人的自己統制の交互作用

個人的自己統制力の高群において、役割取得能力の高い者は低い者よりも有意に ($t(44) = 3.02, p < .01$) 多くの寄付を行っている。これは、先述の援助行動に関する交互作用の男子の結果と同様のものである。

考 察

本研究では、小学校1年生と2年生を対象に、自己統制力と役割取得能力が向社会的行動に及ぼす影響が検討された。役割取得能力の測度としてはFlavel課題、Selman課題、RC課題が、向社会的行動の測度としては援助行動と寄付行動が用いられ、それぞれの相互の関連も検討された。

自己統制力の学年差を検討すると、2年生の対人

的自己統制力が1年生より有意に高いことが明らかになった。これは、塚本 (1995) を支持するものである。

また、向社会的行動について検討すると、平均寄付量は0.82、平均援助量は19.24であり、その値はともに大きなものではなかった。このような向社会的行動の少なさが、小学校1、2年生の一般的傾向であるか否かは、寄付行動、援助行動の実験手続きが本研究独自のものであることから、本研究結果だけでは明らかにならない。しかし、寄付行動に関しては、類似した手続きを用いている中里 (1985) の研究から一定の示唆が得られる。中里は小学校2年生と5年生を対象に検討し、ゲームによって獲得したトークン5枚でノート1冊が交換できると教示した後、他者に寄付を求めたところ、トークンを8枚獲得した群は2年生の83%、5年生の100%が寄付をしたが、5枚獲得した群は5年生で5%、2年生では誰も寄付をしなかったことを報告している。すなわち、8枚群は、ノートと交換できる5枚を除いた残りの3枚を寄付するが、5枚群は寄付すればノートがもらえなくなるため、寄付はしないということである。従って、小学生の場合、自分の利益を犯してまでの寄付行動は極めて少ないということであろう。本研究の寄付行動の手続きでは、カードはすべておもちゃと交換できると教示しており、1枚でも寄付をすれば自分の獲得できるおもちゃは少なくなる。このような手続きが寄付行動を抑制したと解釈できるかもしれない。

さらに、援助行動と寄付行動の関連を検討すると、両者に有意な相関は見られなかった。Mussen & Eisenberg-Berg (1977) は従来の研究を概観し、向社会的行動の課題間の一貫性は比較的高いと述べているが、課題間に相関がないとする研究も少なからず存在する。Green & Schneider (1974) は本の編集作業を手伝う、落ちた鉛筆を拾うという2種の援助行動と他の子どもにキャンディーを分けるという分与行動の関連を検討し、課題間に有意な相関は見られないことを明らかにしている。Yarrow & Waxler (1976)、Staub (1971) も同様な結果を報告している。

このように、課題間に相関があるという研究とないという研究が存在する。この違いを生む原因のひとつに被験者の年齢の問題があるかもしれない。その点でRushton & Wiener (1975) は興味深い。

彼らによると、7歳の被験者では課題間に相関がないが、11歳の被験者では有意な相関が認められた。中里(1985)も小学2年生には課題間の一貫性が見られないが、小学5年生には見られると同様な報告をしている。従って、本研究で向社会的行動の課題間に相関が見られなかったのも、被験者が小学1年生と2年生であったためであり、被験者の年齢が高くなれば相関が見られる可能性が推測される。すなわち、低年齢の子どもの向社会的行動は一貫性を欠き、状況や課題に左右されやすいが、年齢と共に安定性を増し、一貫したものとなるのかもしれない。

一方、本研究では、役割取得の3課題間に有意な相関が見られず、これらが質的に異なるものであることが示唆された。従来の研究では、相関が見られるとする研究と見られないとする研究が存在し、結果は一貫していない。

Kurdek & Rodgon (1975) は、幼稚園児から6年生を被験者として、知覚的役割取得課題、認知的役割取得課題、情緒的役割取得課題の関係を検討した結果、一部の年齢群を除いて3課題間に有意な相関は見られなかったとしている。認知的役割取得課題はFlavell課題、情緒的役割取得課題はBorkeの課題である。また、Leahy & Huard (1976) は4, 5, 6年生を対象に、Flavell課題に類似した課題とRC課題との関係を調べたところ、相関は認められなかった。一方、山岸(1981)は幼稚園児、2年生、4年生を被験者としてFlavell課題とSelman課題の関係を検討し、両者に有意な相関があることを報告している。Kurdek & Rodgon (1975) も指摘するように、これらの事実は役割取得が多様な認知的、社会的スキルから構成されている可能性を示唆している。従って、各役割取得間の関係を明らかにするためには、課題得点の単なる相関を検討するのではなく、役割取得能力の構造に関するモデルを設定し、各下位スキル間の関連を分析することが必要であろう。また、被験者の年齢によって異なる結果が見られることから、広い年齢範囲にわたる組織的な研究が必要である。

本研究では、寄付行動において役割取得能力と自己統制力の、援助行動では性別、役割取得能力、自己統制力の有意な交互作用が認められ、各変数の主効果は有意ではなかった。従って、子どもの向社会的行動には、役割取得能力や自己統制力がそれぞれ

独立に影響するのではなく、両者が共に関連していることが示唆される。即ち、自己統制力が低い場合には役割取得能力の高低は向社会的行動に明確な違いを生じないが、自己統制力が高い場合には、役割取得能力が高いと、低い場合よりも積極的な向社会的行動が見られるということである。つまり、積極的な向社会的行動が生起するためには、自己の欲求を抑制し自律的な行動が行えるとともに、他者の視点に立って他者の困窮の状況が理解できる能力が必要だということであろう。さらにこのことから、役割取得能力が子どもの向社会的行動の動機づけ要因として機能し(菊池, 1983)、行動を促進するためには、まず子どもに自己統制力が育成されている必要のあることが示唆される。

ところで、援助行動においては上記のような交互作用にさらに性差が関連していた。すなわち、男子においては寄付行動と同様な結果が見られたが、女子においては、逆に自己統制力が低い場合に役割取得能力の高い者が低い者よりも多くの援助を行っていた。このような結果はどのように解釈できるであろうか。この結果には、本研究で用いられた援助行動の手続きが関連しているかもしれない。援助行動の手続きでは、被験者は実験者から待っているように指示された部屋から、実験者とは別人に連れ出され援助を要請される。つまり、この手続きで積極的な援助をするためには、実験者の指示からの逸脱をしなければならないのである。従来の研究においては、女子は男子よりも自己統制力と強く関連する逸脱への抵抗力が高いことが知られている。つまり、自己統制力の高い女子は、実験者の指示から逸脱することに高い抵抗力を示し、その結果、本研究の援助手続きの特殊性のために、援助行動が低下したのかもしれない。この解釈の妥当性は、今後の検討課題である。

ところで、Selmanらは役割取得能力の発達について、1) 自己中心的役割取得、2) 主観的役割取得、3) 自己内省的役割取得、4) 相互的役割取得という4つの発達段階を設定し、役割取得能力がこれらの段階を経て発達すると述べている。本研究の被験者である小学1年生や2年生はこの発達途上にあると考えられ、役割取得能力低群はSelmanらの第1段階に相当し、役割取得能力高群は第2, 第3, 第4段階に相当する。一方、塚本(1995)によると、自己

統制力は小学校1年生から6年生にかけて概して単調に増大し、明確な年齢差が存在する。これらの事実を考慮すると、役割取得課題や自己統制尺度で測定された得点の差は、個人の恒常的な能力差というより発達差と考えるべきであろう。そのように考えると、本研究で明らかになった結果は、被験者の発達とともに、各変数間の関連の様相が変化する可能性が考えられる。この点も、今後の検討課題である。

引用文献

- Borke, H. 1971 Interpersonal perception of young children: Egocentrism or empathy? *Developmental Psychology*, **5**, 263-269.
- Buckley, N., Siegel, L., & Ness, S. 1979 Egocentrism, empathy, and altruistic behavior in young children. *Developmental Psychology*, **15**, 329-330.
- Eisenberg-Berg, N., & Lennon, R. 1980 Altruism and the assessment empathy in the preschool years. *Child Development*, **51**, 552-557.
- Flavell, J.H., Botkin, P.T., Fry, C.L., Wright, J.W., & Jarvis, P.E. 1968 *The development of role-taking and communication skills in children*. Wiley.
- Green, F.P., & Schneider, F.W. 1974 Age differences in the behavior of boys on three measures of altruism. *Child Development*, **45**, 248-251.
- Iannotti, R.J. 1978 Effect of role-taking, empathy, altruism, and aggression. *Developmental Psychology*, **14**, 119-124.
- 菊池章夫 1983 向社会的行動 三宅和夫・村井潤一・波多野誼余夫・高橋恵子(編著)『児童心理学ハンドブック』, 金子書房. 715-735.
- 木下芳子 1977 役割取得能力の発達(1) 児童心理, **31**, 187-208.
- Krauss, R.M., & Glucksberg, S. 1969 The development of communication: Competence as a function of age. *Child Development*, **40**, 255-266.
- Kurdek, L., & Rodgon, M.M. 1975 Perceptual, cognitive, and affective perspective taking in kindergarten through sixth-grade children. *Developmental Psychology*, **11**, 643-650.
- Leahy, R.L., & Huard, C. 1976 Role taking and self-image disparity in children. *Developmental Psychology*, **12**, 504-508.
- Long, G.T., & Lerner, M.J. 1974 Deserving, the "personal contract," and altruistic behavior by children. *Journal of Personality and Social Psychology*, **29**, 551-556.
- 丸野俊一 1988 知能はいかにつくられるか, 力富書房.
- Mussen, P., & Eisenberg-Berg, N. 1977 *Roots of caring, sharing, and helping*. W.H. Freeman & Company.
- 中里至正 1985 道徳的行動の心理学, 有斐閣.
- Rubin, K.H., & Schneider, F.W. 1973 The relationship between moral judgment, egocentrism, and altruistic behavior. *Child Development*, **44**, 661-665.
- Rushton, J.P., & Wiener, J. 1975 Altruism and cognitive development in children. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, **14**, 341-349.
- Selman, R.L., & Byrne, D.F. 1974 A structural-developmental analysis of levels of role-taking in middle childhood. *Child Development*, **45**, 803-806.
- Staub, E. 1971 The use of role playing and induction in children's learning of helping and sharing behavior, *Child Development*, **42**, 805-816.
- 塚本伸一 1995 母子関係が子どもの自己統制に及ぼす影響 — 自己統制尺度によるアプローチ — 応用心理学研究, **20**, 23-32.
- Underwood, B., & Moore, B. 1982 Perspective-taking and altruism. *Psychological Bulletin*, **91**, 143-173.
- 山岸明子 1981 2種の認知的役割取得能力に関する発達的研究 教育心理学研究, **29**, 47-51.
- Yarrow, M.R., & Waxler, C.Z. 1976 Dimensions and correlates of prosocial behavior in young children. *Child Development*, **47**, 118-125.
- Zahn-Waxler, C., Radke-Yarrow, M., & Brady-Smith, J. 1977 Perspective-taking and prosocial behavior. *Developmental Psychology*, **13**, 87-88.

(受付: 1999. 8. 1, 受理: 2001. 8. 1)